

オンライン連続講座「はじめよう多文化ソーシャルワーク」

第 3 回 藤川純子先生講演録 藤川先生のご講演録に当日配布資料の一部を添付しました。

藤川先生：

よろしくお願いします。三重大学教職大学院で勉強しています。小学校の教員でもあります。では、画面を共有させていただきます。

私は外国人の集住地域で勤めているので、まずそのあたりをご紹介しますと思います。流れとしては、自己紹介、私の勤めている地区の日本語指導のこと、それから、現在起こっている発達課題をめぐる外国ルーツの子どもたちの発達障害をめぐる課題のこと、それからいくつか事例の紹介、最後に指導にあたって気を付けたいことを申し上げます。

私は、1990 年代から市内の小中学校で国際学級の担当をしていました。97 年に、愛知県小牧市でエルクラノ君という日系ブラジル人の少年がリンチ殺人に遭う、これは誤解されて殺された事例だったんですが、この事件に非常にショックを受け、日系ブラジル人の子ども達のための活動をライフワークにしたいと考えるようになりました。その頃、基本的な日本語が話せるようになっても、そのあと教科指導がうまくいかないとか、また、差別やいじめの問題、それから母語がうまく保持できない問題、その後の高校進学につながらない進路保障の問題など、いろいろなことがありました。1 年や 2 年頑張っても解決しないと感じるようになり、もっと現地のブラジルの様子も知りたい、ポルトガル語も勉強したいと、JICA ボランティアとしてブラジルに行くことを決意します。

2 年間向こうに行きました。サンパウロ州の田舎の方にある日本語学校を作るところから始めました。同時に 2 年間現地校の夜間部に生徒として、聴講生として通わせてもらうという貴重な経験をさせてもらうことができました。2002 年に帰国後、三重県国際交流財団で外国人生活相談員として仕事をしていました。その後教諭として正規採用となりました。はじめに入った学校は、朝鮮半島にルーツのある人たちがたくさん住んでいる地域で、向こうの芸能文化などを積極的に総合学習に取り入れるということをしていました。その後、三重県最大の外国人集住地の小学校に勤めました。全校生徒の 40%以上が外国ルーツの子たちという学校です。国籍は主にブラジルで、あとはペルー、ボリビア、フィリピン、中国、ベトナム、モンゴルの子など、いろんな子がいます。写真は初期指導の様子です。母語ができるスタッフを中心にしています。

ここで、三重県在住の外国人の内訳についてお話します。ブラジル、中国、フィリピン、それから最近ベトナムの方が非常に増えてきています。この資料は、私の勤めている地区の外国人の人数、1600 人くらい。地区人口に占める割合は 16%になっていますが、若年層の人口が非常に高いので、小学校、中学校、そして幼

稚園での人口に占める割合は、3割、4割になってきています。ボランティアによる日本語教育の取り組みも



行われています。

次に、多言語環境で育つ子どもの発達障害をめぐる課題について、お話をさせていただきます。去年の9月ごろ、毎日新聞で報道されましたが、支援学級で在籍する子どもが、日本人の子どもに比べて外国籍の子は2倍以上になっている、または、「支援学級がブラジル人収容所になっている」というインパクトのある見出しも出ました。「支援学級、外国籍は2倍」という記事の中身です。集住25都市の調査で、外国籍の子どもの5.37%が特別支援学級在籍していると判明しました。全児童では2.54%なので、2倍以上になります。知能検査の数値が低く出るためなのか、または、日本語習得の問題か、それが絡み合っているのか、それらを見極めるのが非常に難しいというコメントを、四谷ゆいクリニックの阿部先生が出していらっしゃいます。四谷ゆいクリニックは、多分日本で唯一、ポルトガル語とスペイン語でWISC検査、発達検査などが行われているクリニックです。

それからこれは、「小4、かけ算も教わらず。支援学級ブラジル人収容所」という新聞記事ですが、日本語が十分に理解できないため、学校や医師と合意形成ができずに特別支援学級にそのまま在籍してしまうという例があるということ。多くのブラジル人の友人や子どもが、強く入級を促されているという実態があること。「日本語教育のシステムが不十分だった時期はそういうケースはもちろんあるが、それが現在も続くならば大問題である、人権の問題だ」と、若林先生が指摘しておられます。

もう一つの記事です。「話せても学べない」。外国籍の子どもの特別支援学級の在籍率が、集住25都市で取り上げました。岡山県総社市で3.9倍、三重県伊賀市で2.1倍、愛知県新城市で4.0倍、静岡県袋井市で3.3倍、甲賀市で1.9倍、ということですね。19%、18%とかなり高い率で特別支援学級に在籍していることが数字として出ています。日本語で行われる検査を、もし母語で行うとしたら20点くらいアップするというようなこともコメントされています。私も何人かの子どもたちを見ていて、この子はWISCで多分90くらいありそう、と思う子が80とか70しか実際出なかったりとかするので、20点というのは実感を持っています。

2019年～毎日新聞連載「にほんでいきる」より



2019年9月1日毎日新聞

「支援学級 外国籍は2倍」



- ▶ 集住25都市の調査で、外国籍の子どもの5.37%が特支学級在籍と判明（全児童では2.54%なので2倍以上）
- ▶ 知能検査の数値が低く出るため？
- ▶ 「障害の問題か、日本語の習得の問題か、あるいはそれらが絡み合っているのか見極めるのは難しい」（四谷ゆいクリニック、阿部院長）

2019年9月1日毎日新聞

「小4、掛け算も教わらず」

- ▶ 日本語が十分に理解できないため学校や医師と合意形成できず、希望しないまま特別支援学級に在籍する
- ▶ 多くのブラジル人の友人や子どもが強く入級を促される
- ▶ 「（日本語教育のシステムが不十分だった時期はそのようなケースもあったが）、現在も続くなら大問題」（宇都宮大 若林秀樹先生）



2019年9月1日毎日新聞

「話せても学べない」

- ▶ 外国籍の子どもの特別支援学級在籍率（集住25都市の調査）
- | | | | |
|--------|--------|------------|------|
| 岡山県総社市 | 19.35% | (全児童4.91%) | 3.9倍 |
| 三重県伊賀市 | 18.31% | (同8.45%) | 2.1倍 |
| 愛知県新城市 | 17.78% | (同4.41%) | 4.0倍 |
| 静岡県袋井市 | 10.65% | (同3.17%) | 3.3倍 |
| 滋賀県甲賀市 | 10.27% | (同5.16%) | 1.9倍 |
- ▶ 日本語で行うIQテスト→母語なら20UP
 - ▶ 特支に在籍する子のうち、日本語指導を受けていない子どもは65%



特別支援学級に在籍する子のうち、日本語指導を受けていない子どもは 65%にもなっています。カミズ先生は、初期の日本語指導を終えた児童や、日本生まれの子どもに生活言語としての日本語と母語をほぼ習得しているのに、両言語において学習言語の習得の獲得がうまくいっていない、ダブルリミテッドの子どもが存在するという点を指摘されています。また、松田先生、中川先生は、調査の中で一般的なダブルリミテッド状態にあるのか、機能的障害なのかの見分けが非常につきにくい、ということもコメントしていらっしゃいます。

「初期の日本語指導を終えた児童や日本生まれの子どもの中にBICS (Basic Interpersonal Communication Skills = 生活言語)としての日本語と母語をほぼ習得しているのに、両言語においてCALP (Cognitive Academic Language Proficiency = 学習言語)の獲得がなかなかうまくいかない「**ダブルリミテッド状態**」の子どもが存在する (Cummins,1984)。

またCLD児 (文化的・言語的に多様な背景を持つ児童、Culturally Linguistically Diverse Children) は**一般的なダブルリミテッド状態にあるのか機能的障害なのかの見分けがつきにくい。** (松田・中川、2017)

ここで、私が出会った特別支援教育が必要な外国ルーツの子どもの事例をいくつか紹介いたします。私も最初の頃、どうしてこの子たちはこんなに日本語を習得できないのかとばかり考えていましたが、最近になって、じゃあどうすればいいのかな、どうしたらこの子たちの明るい未来が描けるんだということを考えるようになってきました。

まず1つ目は、重度の自閉症の子の事例です。ブラジル人の子で日本生まれです。特別支援学級の在籍でした。初めは、どんな特性があるのかも、1年生だったのでまだ全然わかりませんでした。視覚優位であることが分かってきました。例えば、こういうペグボードみたいなものを、彼女は、何千個とあるペグを1回見ただけで、そのあと何回でも再現できたりするようにすごく視覚が優れていたんですね。ひらがなだったら普通

は例えば、リストであひるの「あ」とか、「い」とか順番に教えていきますが、彼女は、リストを使うとかちっとピースにはまるみたいに覚えていけるということが分かったので、そのあと、漢字も全部リストを使って、数字も全部一定のリストを使って教えたら、この子にははまりました。「ちびむすドリル」というウェブ上の教材をダウンロードして使っていました。



この写真は私が使っている名札ですが、ひらがなで分かりやすく、それから自分を連想できるようなキャラクターをつけるということをしました。これを私だけではなくて全職員に持ってもらい、そもそも人には名前があるというところから、この子には指導をしていきました。

次は、ポリビアの子どもの事例です。2年以上の知的な遅れがありました。日本生まれで特別支援学級在籍です。この子の場合、なかなか文字が覚えられないという課題がありました。そこで、この子が知っている、理解できる日本語語彙を利用して、積み木が結構はまったので、例えばかえるの「か」とか、いぬの「い」とかいうことを、教えていきました。さきほど、鈴木先生の事例の中でも、見通しを持たせるということをお話しされていましたが、この子の場合も「今日のメニューはこれだよ」と、「最後にあなたの好きな工作で遊べるよ」と、見通しを持つことで勉強を頑張れました。見通しを持たない時期は勉強が嫌で嫌で暴れてイスを投げたりとかしていたこともあったようでしたが、2年生になってからだいぶ落ち着いてできるようになっていきました。勉強



強したプリントを冊子にまとめて、交流学級の方で紹介することも意図的に行いました。「〇〇君ね、こんなに□□学級で勉強したんだよ」と言うと、みんなが「おー、すごい、こんなにたくさんプリントやったんだ」と、褒めてもらえるというような場面を作るように設定していきました。

次は、ブラジルの男の子の事例です。日本生まれで、特別支援学級です。知的には高かったのですが、不安が強くて多動や不器用さが目立つ子でした。この子とは、保護者との関係作りがなかなか大変でした。「教室でお勉強ができるようになった」…この写真は教え始めて1年経った頃に本人が書いたのですが、教室でお勉強ができるようになったと書いているということは、1年前は教室でお勉強はできなかったのですね。すごく大変で逃げ出したりするのを追いかけてばかりいました。それから「漢字を書けるようになった」と書いてあります。文字も1年間でたくさん習得しました。この子の場合、不安や情緒の課題が非常に大きかったので、気持ちを表す言葉、例えばくやしい、とか、頭にきた、とか、むかつくとかも含めて、言葉で、行動じゃなくて、

保護者との関係づくりからの好循環

③知的には高いが不安が強く、多動や不器用さが目立つ子
(ブラジル籍男児、日本生まれ、特別支援学級)

気持ちを表す言葉 (ex. 「くやしい」) を教える。

↓
暴力などの行動化が減る。

母の心情にも寄り添いながら...

でも試行錯誤

気持ちを言葉で代替させるということ意識していくと、だいたい情緒が安定したという印象を受けました。それから、お母さんの心情にも寄り添いながら、関係を作るということ意識して頑張っていました。

4 番には選択性緘黙のケースです。これは結構多かったです、私が今まで見てきた事例で、日本生まれ

もしかしたら他地域にも?

④選択性緘黙 (ブラジル、ペルーなど、日本生まれ、通常学級)

家庭では、ポルトガル語やスペイン語を話す

学校ではほとんどしゃべらない。

「家族が民族、言語的なマイノリティに属している」ことも原因の一つ?



だけど、ブラジルやペルーにルーツのある子ども、家庭でポルトガル語がスペイン語を話す子で、通常学級在籍ですが、学校では喋らない、ということがありました。そこで、他の地域にももしかしたらあるのかなど、情報交換したいということで提示しています。家族が民族的、言語的なマイノリティに属していることも原因の一つなのかも推察しています。

最後の事例は、多動傾向で学習定着に課題のあるブラジルの男の子の事例です。低学年の頃に来日しています。在籍は通常学級です。この子の観察を、去年ずっとしていました。これは、担任の先生の板書です。この当時 3 年生でしたが、とても丁寧に板書を作られ、図式で示され、絵で示したりとかしながら、この子にわかるような工夫、JSL の子はこの子だけではないのですが、わかるような工夫をととても丁寧にされていました。

学級運営や環境調整で...

⑤多動傾向で学習定着に課題
(ブラジル籍、低学年で来日、通常学級)

ポジティブな場面ではみんなに紹介するように
(集団への承認)、
ネガティブな場面では小声でそっと声かけ
(個別支援)

落ち着かないことをさほど問題だと捉えない文化も。

「日本の学校に適應させること」だけが目的?

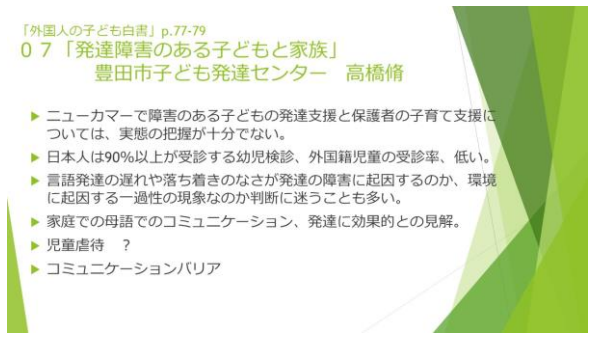
私たち教員の発想も見直すチャンス



この子は授業中に立ち上がったたり、動いたりすることもとても多かったです、彼がとても頑張っているところとか良いところをよく見ていらして、ポジティブな場面ではみんなに紹介するように、集団承認するように声かけ、そして彼がちょっと悪いことをしてしまったときは、小さな声でそっと、個別で声かけるということもされていました。ラテンの子たちは落ち着かないことをそれほど問題だと捉えないという文化的な背景ももしかしたらあるのかもしれないなということを感じています。この子

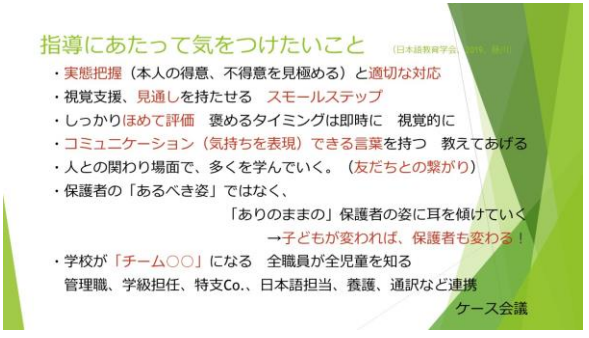
の事例を見ているときに、日本の学校に適應されることだけが目的なのか、もしかしたらこの子たちの持っている、生き生きとした学び方の良さも認めて行かなければいけないのではないかと、私たち教員も学ぶことに対する発想を見直すチャンスだなということを感じました。

さて、指導にあたって気を付けたいことをいくつかまとめましたので、ご紹介します。『外国人の子ども白書』という本の中で、豊田市の発達センターの高橋脩先生が書いていらっしゃいますが、ニューカマーで障害のある子どもの発達支援と保護者の子育て支援については実態の把握が十分でないこと、日本人は90%以上が受診する幼児検診は、外国籍児童の受診率が非常に低いということ。それから、言語発達の遅れや落ち着きのなさが発達の障害に起因するのか、環境に起因する一過性の現象なのか、判断に迷うことも多い。家庭での母語でのコミュニケーションは、発達に効果があるのではないかという見解も持っていらっしゃいました。それから児童虐待を疑うようなことも、ちょっと高橋先生は触れていらっしゃいました。コミュニケーションバリアがあるということ。これはおうちの方となかなか意思の疎通ができない、難しさがあるということを指摘しておられました。



上が受診する幼児検診は、外国籍児童の受診率が非常に低いということ。それから、言語発達の遅れや落ち着きのなさが発達の障害に起因するのか、環境に起因する一過性の現象なのか、判断に迷うことも多い。家庭での母語でのコミュニケーションは、発達に効果があるのではないかという見解も持っていらっしゃいました。それから児童虐待を疑うようなことも、ちょっと高橋先生は触れていらっしゃいました。コミュニケーションバリアがあるということ。これはおうちの方となかなか意思の疎通ができない、難しさがあるということを指摘しておられました。

こちらは去年私が学会発表したものですが、指導にあたって気を付けたいことをいくつかまとめました。実態把握、本人の得意不得意を早く見極めることと、それに対する適切な対応。それから、さきほども紹介しましたが、知覚支援、見通しを持たせる、そしてスモールステップ、しっかりほめて評価をする、ほめるタイミングは即時に視覚的に、と書きました。ほめるとき、日本人はOKマーク<親指と人差し指でまるを作るジェスチャー。>を出しますが、OKマークはブラジル人は相手を侮辱する意味があるので、親指を立てるしぐさをしたりします。そういう文化的な違いにも配慮が必要だとも感じています。これはさきほどの男の子の例で紹介しましたが、コミュニケーション、気持ちを表現できる言葉をもっと教えてあげることがとても有効でした。それから、人との関わり場面で多くを学んでいく。特に公立の小中学校の場合、友達との繋がりとか、関わり場面から多くを学んでいくので、彼らを引き離して別の場所に入れるというだけではなく、一緒に関わることを意識的にやっていきたいと感じています。それから保護者のあるべき姿、ではなく保護者のありのままの姿に耳を傾けていく。子どもが変われば保護者も変わるということが言えるのではないかと感じています。学校のあり方について。学校がチーム〇〇小学校になる。全職員が全児童を知り、管理職、担任、特別支援のコーディネーター、日本語担当、養護の先生、通訳などが連携していくことが必要だと思いました。さきほど、菜花先生のお話の中で、放課後で療育施設などの連携のお話がありましたが、学校の中だけではなく、外との繋がりももちろん重要になってくると思います。それから必要に応じてその子のケース会議を持つということですね。



意識的にやっていきたいと感じています。それから保護者のあるべき姿、ではなく保護者のありのままの姿に耳を傾けていく。子どもが変われば保護者も変わるということが言えるのではないかと感じています。学校のあり方について。学校がチーム〇〇小学校になる。全職員が全児童を知り、管理職、担任、特別支援のコーディネーター、日本語担当、養護の先生、通訳などが連携していくことが必要だと思いました。さきほど、菜花先生のお話の中で、放課後で療育施設などの連携のお話がありましたが、学校の中だけではなく、外との繋がりももちろん重要になってくると思います。それから必要に応じてその子のケース会議を持つということですね。

次に、外国ルーツであるかということと特に配慮したいことについてまとめました。日本と母国で教育や障害に関する考えが違うことを前提にしたいと思っています。例えば、私は去年、ブラジルとボリビアの特別支援教育、インクルーシブ教育の視察に行ったのですが、一番驚いたのは、ブラジルでは特別支援教育という言葉より、特別支援教育は Educação especial と言いますが、Educação especial よりも Educação inclusiva、インクルーシブ教育という言葉が現場で使っていることが印象に残りました。この写真はブラジルの

南米の「インクルーシブ教育」 2019年8月-9月



の小学校の写真ですが、ここにいる子が難聴の子でした。その子に対して支援の先生が付いている。担任の先生は前でお話しされていましたが、障害があると認定されると、必ず一人支援の人がつくことが認められているとのことでした。在籍も特別支援学級、普通学級に分けるのではなく、どの子も普通のクラスに入っていて、特別支援学級在籍と分けないそうです。こちらは、ボリビアの事例ですが、この子が自閉症の子で、隣にいらっしゃるのが介助員さんです。なんと介助員が公

式な形ではつかなくて、この介助員さんは保護者がお金を出して、自分で雇わなければいけないそうです。同じ南米でも支援の仕方だとかシステムにかなり違いがあると感じました。

次に母語や母文化を大切にしたい指導を挙げました。例えば私の学校での事例ですが、近くにブラジルの商店があり、食材とかお菓子とかを売っていますが、子どもたちがさつまいもを育てて、それを先生方に 100円とかで売り、そのお金を持って、ちょっとおやつを買ってピクニックをするという取り組みをしました。特別支援学級の子たちはブラジルの子が多かったのも、このお菓子を買うことも楽しんでいたり、お金の計算などの勉強にもなりました。

あと、構音障害については、母語干渉があるかどうかというのが、見極める基準になるかと思います。例えば、「先生」と言えず「てんてい」となる子、「コアラ」と言えず「トアラ」となる子がブラジルの子でいたのですが、S と T の言い間違いは、他のブラジルの子では起こりません。S と T の母語干渉はポルトガル語の話者にはないです。でもペルーの子などスペイン語の話者の子だと Y と J の母語干渉が起こります。例えば「にちようび」が「にちじようび」になったりすることが起こります。あと、「じゅんこ」という私の名前も「ふんこ」になったりするのはスペイン語の子で起こります。こういう外国語に対する知識が少しあると、それが母語干渉なのか、構音障害によるものなのかというのが、判別で

外国ルーツであるからこそ配慮したいこと

- ・日本と母国で教育や障害に対する考えが違うことを前提とする
- ・母語や母文化を大切にしたい指導
- ・保護者とのより共感的な関わり
- ・通訳者との連携（用語の整理）
- ・多言語による資料提供



発達障害情報・支援センター

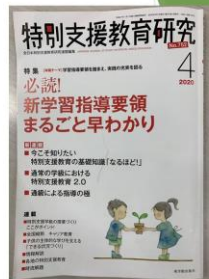
国立障害者リハビリテーションセンター
<http://www.rehab.go.jp/ddis/>

- 外国人保護者向けパンフレット（多言語版パンフレット）
 「お子さんの発達について心配なことはありませんか？」
 ～日本で子育てをする保護者の方へ～
 「Do you have concerns about your child's development?」
 ～For parents raising children in Japan～
- 【やさしい日本語版/Japanese】
- 【英語版/English】
- 【中国語版/Chinese / 繁体中文】
- 【韓国語版/Korean / 韓文】
- 【ポルトガル語版/Portuguese / Português】
- 【スペイン語版/Spanish / Espanol】
- 【タガログ語版/Tagalog / Tagalog】
- 【ベトナム語版/Bengali / বাংলা】
- 【ネパール語版/Nepali / नेपाल】
- 【ベトナム語版/Vietnamese / Tiếng Việt Nam】
- 【インドネシア語版/Indonesian / Orang Indonesia】
- 【ミャンマー語版/Myanmar / မြန်မာ】

きるのではないかと思います。

また保護者とのより共感的な関わりが大事だということ。日本人のお母さんたちともそうですが、言葉が分からないことから保護者の方もかなり不安を持っているので、より細やかに対応することが必要だということを感じています。それから、通訳者との連携。多言語による資料提供。これはご存知の方も多いと思いますが、「お子さんの発達について心配なことはありますか」というパンフレットが発達障害者情報支援センターのホームページのほうに出ています。やさしい日本語プラス12言語で掲載されています。

今日の資料は子どもの個人情報も載っているので皆さんに共有することができませんが、後程、私が今年の4月に特別支援教育研究に書いた記事をアップします。今、保護者にインタビューとりながら、外国ルーツの子たちの支援で大切にしたいことをまとめています。これもまたあとで、チャットに共有したいと思います。あと、単著の本でこのテーマについて書いているものが、これしかないのですが、この2月に出たばかりの『「発達障害」とされる外国人の子どもたち』という本が出ました。非常に参考になるとと思いますので、ご紹介いたします。ここで終わります。どうもありがとうございました。



● 藤川先生 質疑応答

参加者：

こんにちは。保育所勤務をしています。今まさに就学、小学校入学を控えて、日本語の問題なのか、その子の発達の問題なのかということで、就学先を今後どうしていけばよいのかというところです。私達は繋げるほうの立場なので判断が難しいところもあるのですが、どうしたらいいのかなど。ポルトガル語ができる臨床心理士の人がいれば、なるべくお子さんの実情に近い判断ができるのかなと思っていますが、そこまではまだちょっと難しいというところが実情です。どこで診断をして頂いたらいいのか、それから、おうちの人の理解をどのように得ていったらいいのかが、今悩んでいるところです。

藤川先生：

今、保護者さんへのインタビューをとって、保育園でどうだったかということもいくつか、貴重なご経験をお話いただきました。素晴らしかったのは、ある園長先生がその子の特性をよくご覧になっていらした事例です。その子はこだわりが強くて教室の中に全く入れなかったそうです。遊ぶのもお給食食べるのもみんなもう廊下や外で。どんなに寒くても外にいるそうです。何度も机を戻すのですが、彼女は自分の机を出してしまうと。そうしたら、先生はそれを受け入れて、園長先生がいつもその子に付き添って、ずっと外と一緒にいてくれたそうです。あと、園の通訳の人を医療機関に同行させてくださったらしいです。保護者の方が今はあり得ないと思うけど、とお話ししてくださいました。医療機関に繋ぐときに多分お母さんだけだと不安だろうから、園の通訳の人が一緒に行ってくれて、それから先は、お医者さんと家族がずっと繋がって。そこの家族、兄弟も発達課題があったので、家族ぐるみでお医者さんと連携が取れて、いい支援につながったと聞いています。どうしたらいいだろう、どっちだろうというのは迷うところですが、できる支援をやっていくところからしか、構

築していくしかない。誰かに決めてもらおうと思っても、なかなか決めてもらえないのではないかと私は思っています。

参加者：

先生のお話、とても感銘を受けました。特に南米の、ブラジルとかですね、お子さんが日本の学校で日本の子どもたちと一緒にいるわけですけども、そのときに、南米のお子さんの特徴と言いますか、日本人の先生方に、これはちょっと特別支援のように感じるなあと思われる場面があるかなと思います。先生が今まで関わってきた中で、南米のお子さんの特徴で、これは普通だとか、日本人とちょっと捉え方が違うということがあれば教えてください。

藤川先生：

一番特徴的なのは、多分スキンシップですね。触りに行ってしまうんですね。ハグしたり、キスしたりという文化が当たり前なので、よくトラブルになります。かわいい女の子を触りに行ったり、チューしに行ったり、抱きしめに行ったりということは起こります。それは、日本人からすると「ええ～」となりますが、ラテン系の子たちには当たり前です。特に来日したばかりの子は、日本はそうではないということが分からなかったりして、小さい子にびっくりされることはよくあります。あと、10歳くらいになるまで、男の子は落ち着かない子が多いというか、動いていってしまう。授業中とかに立ち歩いてしまうことが、よくあるなあと思います。でも私が見ている感じだと、11歳くらいになってくるとだんだん落ち着いて座れるようになってくる子が多いと思っています。

さきほど成育歴についてのご質問があったんですけども、私の学校に在籍する子は日本生まれの子たちがほとんどです。支援ファイルを、幼稚園や保育園や低学年の時に作っているの、そういう履歴とかはかなりしっかり把握をされています。大事なものは、今までどうだったということだけでなく、これから

どうするか。これから日本に定住していくのか、帰国する意思があるのかはすごく見極めながら進路決定をしっかりとしていかなければいけないと思います。療育手帳を持っている場合は、障害者枠を使えるので、有利なところは上手に利用していけます。

参加者：

ブラジル系の方が多地域にいます。私共、国際交流協会で、入り込みとかの支援をしているのですが、そのときに特別支援学級に入っている子が多いということがあります。学校の先生方はやはり一つのクラスの中で手厚い支援ができないから、親御さんにも説明して、特別支援学級に入った方が手厚い支援が受けられるという考えを持っていらっしゃる方も多く、勧められることが多いというのでも聞きます。それが、病院などで、WISCを日本だけだったり、通訳を介して(受ける)、そういうはっきりとした客観的な診断がつく前の小学校での特別支援学級に入ることがいいのかということと、学校の先生が配慮ができるような環境、学級づくり、もっと教室の中で学ぶということを工夫されたほうがいいのかなと感じたりしています。その辺りのことを教えていただけますか。

藤川先生：

難しいですね。まず、日本語支援が十分に整っていないから、代わりに特別支援に入るということは良くあると思います。診断がつく前に特支に入級させるというのは、ちょっとよく分かりませんが、最近あった事例をご紹介します。落ち着かない子で、WISCとか発達検査を受けてみて、入学前に特別支援学級判定が出ていました。でもお母さんが絶対にそれを受入れず、うちの子に障害はないと言って、普通学級に入りました。普通学級に入っても1年生ですごく大変な状態ですが、この間、初めて発達検査、WISCを受けてみたら、結構高かったんですよ。私もその子は知的障害ではないと思っていたら、やはり結構高くて、この子の課題は知的ではなかったとい

うことがわかりました。

客観的な数値を見てみて、そこに20ぐらい誤差があることも念頭に入れながら、参考にしながら、現場では対応してほしいと思います。中には乱暴な先生がいらっしゃるのも事実で難しいですが、コーディネーターの先生とか、よくわかっていらっしゃる先生もいらっしゃると思うので、うまく調整しながら、連携を取りながら。この子は知的発達どうかと思うのですが、と、感覚的に思っているところは、ぶつけていくと良いのではと思います。その話し合いの中でうまくいかなかったら仕方ないですが、自分もやもやしていることをお持ちだったら、先生にお話しになったらどうかと感じます。

参加者：

学校教育の中で、どこまでが日本語の習得に関する問題・課題なのか、どこまでがその子の知能とかの課題なのかがわかりません。まだ1年生なので、早いうちに対処していいのか、それとももう少し長い目で、やり方を変えながら見た方がいいのか、非常に迷っています。

藤川先生：

どの子もケースバイケースなので、この子は日本語ですね、この子は発達障害ですねとは簡単には言い切れないと思います。ただ、支援者として両方の情報を持っていることはすごく大事です。先ほどの構音障害のこともそうですが、日本語指導とか、言語教育の知識が少しあれば、これは構音障害ではないということが言い切れることもあります。例えば、先ほどの「にちじょうび」と言っているスペイン語圏の子について、構音障害ではないかと疑うかもしれませんが、スペイン語の知識があれば、それは構音障害ではなく、母語干渉だとわかります。特別支援教育の知識、それから日本語指導の知識を、完璧でなくても支援者が少し頭に入れていくことは重要だと思います。

参加者：

通訳の方が同じチームに入ってもらふ必要性をすごく感じています。茨城の方で、特に私達の支援で動いているところは分散地域なので、通訳の方に入っただけということが難しいです。茨城の方でも進めていただきたいと思っていますところでは。

藤川先生：

菜花先生のお話を伺っていたら、デイケアの中に母語スタッフがいることはとても強みだと感じました。特別支援学校も、通訳の方が入っている特別支援学校と、入っていない学校があるんですね。通訳の入っていないところは入っていないなりの工夫をすべきで、私の知っているある事例では、保護者とのやりとりをメールで行っているということを知りました。メールで書くと、Google 等を使って翻訳できます。また、私が関わった、最初の女の子の事例では、全部写真に撮って、写真で絵日記にしていました。普通は連絡帳を使いますが、その子は連絡帳をやめたんです。絵日記を書くことをその子の宿題にして、写真を保護者に見せるということもしていました。色んな対応の仕方が工夫できるように思います。

参加者：

今例えば通訳の重要性は、もちろん検査とか面談の時とかいろんな時にあります。しかし、外国の方のコミュニティが結構狭いこともあり、この通訳の方の前で喋ってしまうと私の家族や子どものことが知られてしまうから心配だとか、プライバシーのことを気にする方も当然親御さんの中にはいます。その一方で繋がらないと状況もわかっていけないということもあります。例えばそういう検査を受けたり病院に行ったりするときに、通訳を頼みたいと親御さんが思ったときに、三重の方では、医療通訳とか福祉機関の方で呼べば通訳が来てくれるとか、何かアセスメントシートが翻訳されているとか、そういった取組はありますか。

藤川先生：

市によりますが、四日市は特別支援のファイルの保護者さんへの質問シートとかは翻訳されています。それを全国的に共有するとか、多言語化がもう少し進んでもいいのと思います。通訳さんと地域コミュニティとの関係は本当に難しく、知られにくいということは実際にありますし、本当にケースバイケースと感じています。

参加者：

前回の講座では保育をテーマにして、保育園の先生がこの子の言葉の遅れは何だろうというようにとても悩まれている方がたくさんいました。母語が話せる保育スタッフがいる保育園というのは茨城ではまだこれからだと思いますが、三重の保育現場の方では、通訳の方がいますか。

藤川先生：

保育園にも通訳が付いています。幼稚園にも、本当にベテランのブラジル人の通訳の方が付いています。適応指導員という形でついていると思います。特別支援学校にも何人か通訳さんがいるので、そういった意味ではかなり充実していると感じています。

参加者：

先ほどのカミンズさんの話のように、私達は基本母語で表現できるところの上に日本語が、というふうには思いますが、実際に学校で言葉を教えようとしている方たちは、特に小学校に上がった後の母語の関わりについて、迷っているところもあると思います。家の中ではしっかり母語で話した方がいいということは、三重の方の結構教育現場では広がっているのでしょうか。

藤川先生：

学校によって違うと思います。地域によっても違うと思います。そんなにも豊かに母語を大事にしている

という学校ばかりではないと思います。
先日の保護者さんの聞き取りで出てきたケースですが、発達障害のあるブラジルの子が日本の学校に入った時に、もうポルトガル語か日本語かどちらかにしてくださいと言われて、この子は将来日本で生活するから日本語だと思って、日本語を選択したそうです。だからもう、その子は日本語しか話さない。

20 歳になっても日本語しか話せないという状況です。思春期になってお父さんと話したいときに、お父さんが日本語が上手でないから、うまく話せないということが起こって、やはりあの選択はまずかったなとお母さんが語っていました。

以上